

市史講座第3回ミニレポート

6月16日(土) 第三回の講座が開かれました。

第1部：「松江の外の松江—同郷会と同郷人雑誌」(講師：島根大学法文学部教授 竹永三男先生)



同郷会とは、出生地を離れて他地域に移住した人々が、その移住地で同郷人同士の親睦を深めるために結成された団体であった。また、同郷人会雑誌とは、そうした同郷会に集う人々や移住した人々を読者対象として、東京などで発行される雑誌であった。

竹永先生は、まず同郷会・同郷人雑誌についてこのように定義されてから、それらが明治期以降に生み出された歴史的背景や全国的な動向を説明されました。

そして、それらを踏まえた上で、島根県協会(東京、明治34年結成)と社団法人島根県友会(大阪、明治36年結成)という島根県や松江市に関わる二つの同郷会を取り上げて、その会員構成(出身地、職業・所属)や活動の特徴を明らかにされました。

このような同郷会・同郷人雑誌は、郷里を離れた人々の郷土論や郷土振興願望が見えてくること、また、会員構成を詳しく分析することで、松江市域の各町・各地域の特徴を掴み出すことができることから、『松江市史』近現代編において重要なテーマ・史料となると述べられました。

第2部：「松江市の動物たち—過去・現在・未来—」(講師:松江市文化財保護審議会委員 佐藤仁志先生)



佐藤先生は、松江市史の自然環境部会で主に動物に関することを担当されています。今回は、絶滅してしまった動物のなかからニホンアシカ、シンジコハゼについて話してくださいました。

ニホンアシカは、日本固有種で日本近海の温帯を中心に亜寒帯から亜熱帯に生息していましたが、1950年代に絶滅したそうです。しかし地名にその名を残しており、古くは『出雲国風土記』に「等々嶋」として美保関沖の御前島と日御碕の鱸島が登場するとのこと。また竹島は、最後の集団繁殖地で大量捕獲された時代があったことや、世界で15体残るニホンアシカの剥製のうち8体が島根県内にあることを話されました。

『古事記』にみえる因幡の白兔の説話に登場するワニはサメというのが通説ながら、ニホンアシカとみる説を紹介され、『出雲国風土記』にでてくるワニの記述を始めとするアシカ説の方が納得しやすい例証をあげてくださいました。鰐淵寺の名称もニホンアシカに由来する、とも。また『古事記』に山幸彦を海の神がミチ(アシカの古名)の皮を敷いて歓待する話がみえるが、出雲大社の古伝新嘗祭には敷物にアシカの皮が用いられることなどを紹介され、ニホンアシカと島根県の縁はとても深いと教えてくださいました。

次いで、日本では宍道湖が初記録となったシンジコハゼの話題となりました。

さらに、塩分濃度が 1/10 であることなど、奥道湖の特異さを列挙され、特定種が猛烈繁殖している例としてヤマトシジミに言及されました。私たちにとって身近な生き物を科学的な研究対象として捉えることの意外な楽しさを教わる講義でした。